

# ヴァイオリン製作者 井筒信一さん

## 国産の材料にこだわり名器をつくる信州の巨匠

ヴァイオリン製作の巨匠といえばアントニオ・ストラディバリ。

17世紀イタリアのヴァイオリン製作者である。だが、21世紀の日本にも

徹底して素材にこだわるヴァイオリンの製作者がいる。井筒信一さんその人だ。

井筒さんがつくるヴァイオリンが奏でる音は、繊細で、流麗で、深く、強い。多くのヴァイオリン製作者とは異なる

“つくり方へのこだわり”が、その見事な音を生み出している。

### いい材料があると 借金してでも買う

JR中央本線・松本駅から車で15分ほど。四方を山々に囲まれた雄大な光景の中で、井筒信一さんは毎日ヴァイオリンづくりにいそしんでいる。「この辺りは静かだし、空気がわりと乾燥しているので、ヴァイオリンづくりに適しているんです」

今年で79歳になるとは思えぬ張りのある声で井筒さんが言う。

ヴァイオリンに使う木は、板状にして重ねておいて乾燥させる。湿度の高いところでは、いい音も出ないし、いいヴァイオリンもつくれないのである。

「僕は今、北海道のアカエゾマツと楓を主に使っています。熱風などで強制的に乾燥させると、松の中の樹脂や松脂などが全部出てカサカサになってしまうので、自然乾燥にしています。長いものは30年くらい寝かせます。僕はうんと材料にこだわっていて、いい材料を見つけると女房には内緒で借金してでも買ってしまおうんです」

そういつて、妻の秀子さんの方を見ながらやりと笑う。

ヴァイオリンの材料には、表側の

板に松、裏側の板やネックなどには楓を使うのが通例だ。ただし同じ松や楓でも、欧州産でなければだめだという演奏家もいる。

「以前、北海道産の木でつくっているメーカーがあると知り、僕も釧路まで見に行きました。そうしたらこれがなかなかいい。もちろん北海道



仕事中は余計な音を耳に入れたくない。だからラジオもかけず、黙々と作業をする。聞こえるのは、夫婦の会話と木を削る音だけ。

産の木が全部いいというわけではありません。丸太の状態でもいい材料になるかどうか、見抜く目が必要です」

### 注文さえあればどんどん 長生きしそうな気がする

そういう井筒さんも最初のうちは、

丸太を見て「これはいい」と思い、買ってから切ってみたらそうでもなかったという経験を何度もした。

「丸太を割っていい材料だと分かる途端に価格が跳ね上がります。だから丸太の状態で見分けることが大事なのです」


あるとき、井筒さんは有名なヴァイオリニスト2人に自作のヴァイオリンを2挺渡して、弾き比べてもらった。片方は長く寝かせた材料、もう片方はそれほど寝かせていない材料でつくったものだった。井筒さん自身は長く寝かせた材料でつくったヴァイオリンの方が、音がいいと感じていた。だが、材料のことはあえて言わずにいた。

するとどうだろう、2人とも「どちらもとてもいい音だが、強いて言えばこちらの方がいい」と言って、長く寝かせた材料のヴァイオリンを指さしたのだった。

「これで自信ができました」

2カ月に1挺のペースでつくるとして、井筒さんは今、25年分くらいの材料を買い置きしている。

「もう25年くらいはつくり続けたい。苦勞して集めた材料ですから、自分で使いたい。注文さえあればどんど



いづつ・しんいち 1936年、長野県生まれ。20歳のとき、偶然出会った人からヴァイオリン製作者を紹介され、この世界へ。その後独立し、松本市でヴァイオリン製作の工房を開く。現在、「弦楽器いづつ」でヴァイオリン、チェロ、ヴィオラを製作するとともに調律、修理なども手掛ける。ヴァイオリンなどの製作教室を主宰する傍ら、自宅のホールで演奏会や演奏教室も行っている。





「自然の材料はいろんなものの恩恵を受けて育つ。だから良い、悪いと分けたりに使う」と井筒さん。



約30種類の鉋を使って木を削る。職人がつくった鉋を、自分に合うように、カスタマイズする。



「注文されてつくと気が入るね」と井筒さんは言う。「ものをつくる人間は、誰のためにつくるのが大切」。



子どもの頃、教会でヴァイオリンを弾く人に憧れていた。だから仕事の話が来たとき、うれしかったそうだ。



ん長生きしそうな気がします。僕は殺されたって死にません」

そう言って井筒さんは茶目っ気たっぷりな笑顔を見せる。

### かな 鉋で削り、叩いて音を聞き、さらにまた削る

材料だけではない。井筒さんにはつくり方にもこだわりがある。

一般にはあまり知られていないが、ストラディバリウスなどの「名器」といわれるヴァイオリンには、製作図面が残っていることが多い。トップクラスのヴァイオリン製作者もそうした図面をモデルにして自分の作品をつくる。

その図面には板の厚さなどの数字も記されている。ヴァイオリンの音の良し悪しは、板の厚さや微妙なふくらみで決まるといわれる。だから井筒さんも基本的にはその数字に従ってつくる。ただ、計るだけでなく板を指で叩いたときの音も聞いて厚さを調整する。

「木の板は自然の産物ですから、音の響き方などは一つひとつ全部違います。ゲージで計って同じ厚さにしても、木が違えば音も違ってくるはず。だから僕は最後まで数字に頼る方法とはりたくないのです」

鉋で木を削り、叩いてみて音を聞き、さらにまた削る。根気のいる作業だ。

板を張り合わせる時などには膠にかわを使う。接着剤は使わない。仕上げに塗るニスも、独自の調合をしている。

余談だが、ヴァイオリンほど松に縁の深い楽器は他にないのではないだろうか。材料に松を使うだけでなく、演奏に使う弓には松脂（ロジン）を塗る。馬の尻尾の毛を束ねてつくった弓にロジンを塗ることで、表面をざらざらにするのだ。松がなければこの世の中にヴァイオリンという

楽器は存在しなかったかもしれない。

### 天才ヴァイオリニストがデビューに選んだ名器

今でこそ、有名なヴァイオリニストが井筒さんのことを「巨匠」と呼ぶ。しかし修業を終えて独立した当初は、ほとんど注文が来なかった時期もあった。

「もうヴァイオリンづくりは諦めて他の仕事をしたらどうか」

井筒さんは兄弟から何度も強くそう言われた。けれども井筒さんは歯



作業場の2階には、天井の高い小さなホールがある。風通しのよいこのホールには、ピアノもあり、時折、演奏会が開かれる。

を食いしばり、ヴァイオリンづくりの仕事続けた。それは父親との約束があったからだ。

「父親は木地師（木工職人）でした。僕も子どもの頃は後を継ぐものと思っていました。でも偶然知り合った人からヴァイオリン製作の仕事を教えられ、もともと音楽が好きだったこともあってそちらの世界に行くことにしました。ただ、父は厳しい人でしたからなかなか言い出せませんでした。それでもある日、怒鳴られることを覚悟して父に打ち明けると『死ぬまでやるならいい』と言われ

たんです。『職人ならそれくらいの覚悟でやれよ』ということなのでしょう。だからちょっと注文が来ないくらいでやめるわけにはいきません」

そんなこともあったから、1995年、天才ともいわれるヴァイオリニストの五嶋龍さんが札幌でのデビュー演奏会で井筒さんのヴァイオリンを選んだときは「涙が出るほどうれしかった」と言う。

### 一流の演奏家が弾きこむことで楽器も成長

ヴァイオリンの他に井筒さんはチェロやヴィオラもつくる。子ども用の小さなヴァイオリンもつくる。「教える時間を取られるくらいなら自分の仕事をしていたい」という理由で弟子を取ったことはないが、一般の人向けのヴァイオリン製作教室は開いている。今は長男の功さんもヴァイオリンづくりをしている。「いつも最高のものをつくろうという気持ちでいます。でも、できあがったときには、こういう音になったのかと思い、次はもっといいものをつくろうという気になります」

井筒さんのその言葉を聞いて、ある演奏家が「では、われわれは未完成のヴァイオリンを買わされているのか」と気色ばんだことがある。それに対して井筒さんはこう答えた。

「そうかもしれませんがね。でも、いい楽器というものは、一流のプロが弾きこんでいくうちに成長して、ますますよくなっていくのです。だから僕たちは、弾きこんでよくなる楽器をつくらないといけないのです」

巨匠と呼ばれながら、偉ぶる様子など微塵も見せず、井筒さんは今日も黙々とヴァイオリンをつくる。一流の演奏家とともに成長していく名器をつくるため、そして、父との約束を守るために。